

# 白洲次郎に思っ

近代史と言うものは、往々にして語りづらい場合が多い。それは、現代に生きている人々に大いに影響を与える場合があるからである。NHKで放送された「ドラマ白洲次郎」も何度も放送を延期された。おそらく選挙に影響がでると言うことで、配慮したのであろう。第三話を拝見し、なるほどと思った。

白洲次郎と言え、思い浮かぶのは、GHQに対して「従順ならざる唯一の日本人」と称された人物だ。ケンブリッジ仕込みの英語を駆使し、日本国憲法改定に当たり、主張すべきは主張したと理解している。ところが、彼に関して悪いうわさも

渦巻いていることを、ドラマを見て初めて知った。戦後の日本の混乱に乘じ、GHQとの間で、暴利をむさぼったとか、GHQのスパイではなかったのかと言おうわさである。真相のほどは、私は、知らない。だが、戦争が勃発する



前、白洲次郎は、第二のふるさとイギリスへ向かい、時の有力者を集め日本とイギリスが戦争をしないうように働きかけてほしいと懇願している。それを彼は、ノーブレス・オブリージの一環として行動した。ノーブレス・オブリージとは、身分の高い人には、それに伴って大きな義務があるという考えかたである。これは、フランス語から来ているので、フランス人の考え方だと思いがまさにとおりだと思ふ。また日本の将来を見越し、貿易国日本に必要な通産省を初めて立ち上げてくださった。この先見の明に対しては、頭の下がる思いである。さすがは、先見の明をもつて九鬼隆義を補佐した白洲退蔵の孫である。

北康利氏の「白洲次郎・占領を背負った

男」の中では、白洲次郎は、愛国心に満ちた、正義漢と云う設定で描かれている。しかし、彼の吉田茂の懐刀と云う立場を考えれば、戦後のGHQとの折衝において説明しづらい行動もあつたのではないか？またその立場の中で、傲慢とも受け止められる行動もあつたのではないかの思いも残る。

1949年7月。敗戦から四年後の日本で、一大騒乱となつた事件が発生した。「国鉄総裁 下山事件」。もちろん吉田茂内閣の時だ。三田市高平に、ある豪農のりつばなお宅があり、二年前にたまたま、兄が其の地所の一部を畑として借りていたが、それが下山氏の実家だと聞かされたのは、この原稿を書こうとしていた時であつた。出勤途中、運転手に「五分で戻つ

てくるから待つてくれ。」と言ひ残し、三越デパートの中へ消えた下山氏。そのまま行方不明になり、明る日常磐線五反野のレール上で轢断死体となつて発見された。下山氏は、自殺なのか他殺なのか？他殺だとすれば何者によるのか？また、下山事件に続いて、国鉄を巻き込んだ三鷹駅列車暴走事件や、松川事件と言われる事件が7月から8月にかけて連続発生した。いずれの事件でも死者数名、負傷者二十名をだしている。検査及び吉田内閣は、一連の事件を「共産主義者の犯行」と発表した。しかし事実はそうではなかつた。メディアや世論は共産党への憎悪と危機感で沸きかえり、この状況の中、共産党は、抵抗する力を既に失つてしまつていた。逮捕された共産党員数名は、後に裁判で無実と証明され釈放されている。もちろん反

共産勢力と言え、GHQである。国鉄の当時の労働組合は共産勢力が中心であつたが、日本の隣国においても共産勢力が台頭してきつつあつた時代である。結果として、吉田茂のこの発表により、労働組合は解体され、職員九万四千人の人員整理が断行された。世論を操るのは、恐ろしいことである。後にこの事件において、GHQと右翼の陰謀説は有力視されている。

白洲次郎が後世、話題の人となるのには、それなりの要素がある。外においては傲慢で（失礼）家庭に帰ると、ジエントルマン。妻に対しても支配的ではなく、お互いの自由を尊重していたところは、欧米タイプのカップルの様でこの時代としては、まことに進んでいる。妻としては、とても有り難い旦那様である。（文・種村好）

九鬼奔流通信	
2009. 秋	Vol. 009
発行：NPO法人 九鬼奔流で町おこしをする会	

# 欧米人が褒めた江戸の町

今回は、とくにこれといったテーマが思いつかばなかつたので、私が読んだ本で印象深い内容の一部を記述します。この本は町おこしをテーマとした本です。そこからから抜粋しました。より詳しく内容が知りたいと思われる方には本をお貸しします。

見出しが語る通り江戸の町は、私たち現代人が想像するより立派であつたことは、幕末日本に来た多くの欧米人が語っています。．．．十七世紀から、十九世紀前半までの日本の町は、世界のどの国の街にくらべても、清潔で、美しくかつたらしい。明治以前に、日本をおとずれた欧米人の多くは、中東からアジアを通過して、長崎に着くと、やさしい風景に心がなごんだといふ。長崎から江戸に向かう道中では、町

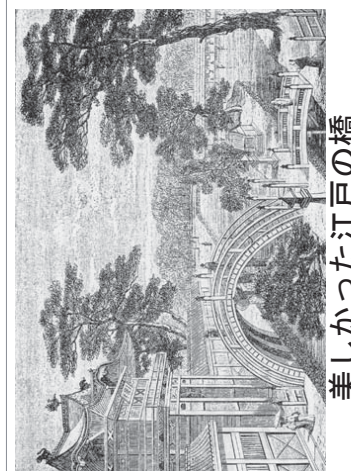
の清潔さ、道の整備のよさ、清楚な庭と花の豊富さに驚いた。また大衆のモラルが高い国だつた。いくつか例をあげてみよう。江戸時代には、オランダ商館長が参勤交代のように江戸に参府し、オランダ・東インド会社の医師が同行した。その医師の旅行記録が残っている。まずはケンペルである。彼はドイツ人であり、一六九〇年に長崎に着き、江戸で将軍・綱吉に二回も面会した。彼の印象を次のように

述べている。「東海道は、道の両側に松の木が短い間隔で植えられ、排水溝がある。道がよい」「百姓が、毎日落ちてくる松の実や松かさ薪として集め、馬ふんは肥料として持ち去るか、道はきれいだ」「民家は小さく粗末で、大通りにはものを作る仕事場や小売店が並び、垂れ下がっている黒いのが外観を美しく飾っている」「日本には泥棒がない」「一七七五年から七六一年にかけて在日したスウェーデン人のツ

ンベリーは、「どこでも道路がよく手入れされ、道幅が広く排水溝がある。ヨーロッパのように馬車道が道路を傷めていない」と述べている。イギリス人のロバート・フォーチュンは、一八六〇年と六一年の二回にわたつて訪日し、「探訪記」を書いた。「日本人は身分の上下を問わず、花が好きだ。良家らしい家は、どこも裏庭に花壇と小さな池があり、それらは清楚に整えられている」「日本の低い階層の人が花を愛する心は、イギリスの同じ階層の人たちとくらべると、はるかにまさつている」「貧しい人たちは、混浴の湯で清潔になる。考えてみると、よい習慣だ」のちにトロイア遺跡の発掘という偉大な仕事に成功したドイツ人のシェリマンが、一八六

五年に、中国から横浜に着いた。彼は旅行記で述べている。「日本人はみな園芸愛好家である。日本のすべての住宅はおしなべて清潔さの手本である」「日本人は疑いもなく世界で一番清潔な国民である。よく風呂に入る。混浴でも風紀が乱れない。すばらしい道徳だ」もし、鎖国政策が解除されていたならば、欧米人の日本への旅行者は多かつたに違いない。最近、初めて来日した韓国から若手学者たち十数人と話し合う機会があつた。彼らはいずれも、アメリカやイギリスに留学したエリートたちだ。二ヶ月近くかけて、日本の各地を訪問した。もつとも魅力を感じたのは、東京ではなく、金沢と松江だつた。そこには、美しい江戸時代の日本が残っているからだといふ。金沢や松江では、家の

庭や街路には花や立ち木が多く、城と堀があり、路地は清潔だ。統一された街並みが残っている。犯罪率が低いので、住宅に開放的な空間が多く、生活の味が滲み出ている。確かな江戸時代が残っている。彼らは、日本固有の優雅な都市景観に感動したようだ。．．．



美しかつた江戸の橋

三田にも幕末から明治にかけて外国人が来ていますが、その時の感想などを記録した資料でも残つていれば興味深いものであつたと推測できます。（文・小川貞昭）